ナサナエル・ウエストの「ミス・ロンリーハーツ」

－その comic strip 的側面について－

内田　豊

Nathanael West の代表作である *Miss Lonelyhearts* を comic strip（続きマンガ）的な側面から考察を行った。1930 年代という大不況の時代に、当時流行していた comic strip というフォームを用いて、West がいかにして実存的な人間の存在という深刻な問題を扱っていったのか考えた。

方法としては主人公である Miss Lonelyhearts の描かれ方、彼と対峙する二人の対照的な登場人物である編集長 Shrike と恋人の Betty の人物像、そして Miss Lonelyhearts を運命的な結末に導く事になる Mrs. Doyle と Mr. Doyle 夫妻を眺めて行った。そうする事によって、この作品が読者の興味を惹かせる comic strip 仕立てに創られながらも、人間の「孤独」という根源的な問題を包含する深淵なものになっている事を確証しようと試みた。

本稿に続くものとして、この作品が秘める超現実的な側面、黙示録的な側面、そして時代的な側面の研究が考えられ、順次考察を続けたい。

Picture Brides in Early Japanese Immigration to Canada

Donald Kaduhr

Japanese immigration to Canada commenced during the latter part of the 19th century and the first two decades of the 20th century. 1908 marked the beginning of the "family-building" phase for Japanese immigrants in Canada. Married men, who had decided to remain in Canada, were now calling their wives and children over from Japan. But it was the single men who wanted to change their nomadic existence - as well as to relieve the pressure on them to marry - that accounted for the continuous immigration of women across the Pacific. Some men returned to Japan to have marriages arranged (the miai-kekkon).

But the favourite and most practical scheme was the "picture bride" plan, which began with an exchange of photographs after relatives of the immigrant had sought out a woman whom they regarded as suitable. If the potential groom was influenced at all by the photograph, he would write to his relatives and instruct them to register their "marriage" in Japan. Furthermore, after an exchange of letters between the now married couple, the woman would then travel to Canada as his bride after the groom had arranged for a passport and travel expenses. In most cases the parties were complete strangers, and the union was based essentially on the couple's suitability to be helpmates in the struggles of a new life in Canada.

To marry as a "picture bride" was almost exclusively determined by the limited available options for the Meiji era women. They recognized that remaining single was socially unacceptable in Japanese society, so they chose to be picture brides as their only viable option for marriage, and for a number of valid reasons. It was a choice that would inevitably change the future course of their lives, but one that stabilized the Japanese community in Canada so that a secure future was procurable for all the Japanese immigrants.

外国語学習に関する自己分析と動機の研究

－学力別観点からの英米文学科新入生の実像－

藤澤　良行

小森　道彦

本研究は、英米文学科入学生が、自分の英語力についてどのように自己分析しているか、またどのような英語学習動機を持っているかについての研究である。それが英語学力とどのような関係があるかについて、標準テストにより母集団を上位群・中位群・下位群の３群に分けて考察している。調査には、5～1の５点法による評定で回答する調査用紙を使用し、そのスコアを因子分析などで統計処理を行った。

結果としては、おおよそ各群のテスト平均と自分の英語学力に対する自己分析の点数とには相関関係があること、因子分析の結果から、英語学習動機に関しては、従来の英米文学科がめざす教養的志向よりも資格や英語の受信・発信といった英語の技術そのものに対する志向が各群を通じて強いことがわかる一方で、英語教員を目指そうとする動機が予想以上に低いことが判明した。英米文学科の今後目指す方向は、このような学生の志向の変化をふまえた上で議論されなくてはならない。

Relative Truths

Bonnie Yoneda

Storytelling is such a natural part of our lives. It is something we do every day as we gather around the dinner table and share stories about the people we met, the places we went and the things we did. They have often been called gifts of the heart. In this paper we are looking at storytelling from the family point of view and the importance of passing on the family stories.

「都市大山崎の歴史的位置」

小西　瑞恵

大山崎は、戦前から中世の油商人である八幡宮大山崎神人の根拠地として知られ、「離宮八幡宮文書」を中心に商業史研究が積み重ねられてきた。戦前・戦後にかけて、原田伴彦が大山崎を中世都市として論じているが、離宮八幡宮の門前町と分類していた。大山崎を都市とする研究が本格的に始まったのは、『島本町史』と『大山崎町史』の編纂を通じて史料調査が行われ、新出の史料が見出だされたことにより、大山崎の内部構造を明らかにすることが可能になってからである。このような研究としては、小西瑞恵・脇田晴子・今井修平・仁木宏・福島克彦のものがあるが、どのような都市として大山崎を規定するかについて、まだ統一的な見解が成立しているとはいえない。都市のタイプを規定するために、これまでの諸研究を検討して問題点を提起し、港湾都市としての大山崎の実態を明らかにすることを試みた。また自治都市大山崎が京都や淀をはじめ、西日本各地と密接な連関性をもっていたことを再検討し、商業・流通の拠点としての実像を明らかにした。中世都市大山崎の近世都市への変化については、秀吉の城下町化が画期であると結論し、近世都市としての大山崎については、惣中の構成者が離宮八幡宮の社家として中世以来の階層構成を維持し、江戸幕府による保護を背景に、離宮八幡宮の神領として変容していく限界性について論じている。

ブドウ種子ポリフェノールのフリーラジカル捕捉活性

－アルカリ域における熱安定性とコンニャクの試作－

北尾　　悟
寺本　円佳

アルカリ pH 域におけるブドウ種子ポリフェノール（GR−S）の DPPH ラジカル捕捉活性の熱安定性についてアスコルビン酸（AsA）と比較検討した。またアルカリ pH 域で加熱ゲル形成を行うコンニャク製造に GR−S を応用し、GR−S 配合コンニャクを試作し、その DPPH ラジカル捕捉活性をはじめとする各種の評価を行った。

中性 pH 域と比べると、アルカリ pH 域では GR−S も若干ラジカル捕捉活性が減少したが、AsA よりもはるかに熱に対して安定だった。例えば、AsA が完全に活性を失った pH 10.0、100 ℃、30 分処理において、GR−S は捕捉活性を約 60%保持していた。このことより、GR−S はアルカリ・熱に対して非常に安定な DPPH ラジカル捕捉化合物であることが明らかとなった。GR−S 配合生コンニャクは DPPH ラジカル捕捉活性を有意に示すことが明らかとなり、醤油ベースのおでん風味とした場合でも活性を確認できた。一方、同濃度の AsA 配合生コンニャクでは弱い活性値しか示さず、おでん風味となると活性が検出できなかった。GR−S 配合コンニャクは、無配合および AsA 配合コンニャクと同等なテクスチャーを有し、官能検査でも同様の結果が得られた。GR−S 配合コンニャクは特に赤色に着色しており、官能検査でも生の場合、外観そして全体の評価が悪かった。しかし、おでん風味となると今回試作した 3 種類のコンニャクに大きな評価の違いはなかった。

食用タール色素に関する研究（Ⅳ）

－金属イオンによる色素の変色・退色に対するりん酸塩の効果（1）－

神藤　光野

打田　良樹

本報では、銅、鉄、すず、アルミニウムイオンによる食用タール色素の変色・退色に対するりん酸のナトリウム塩（りん酸一ナトリウム、りん酸二ナトリウム、りん酸三ナトリウム）およびカリウム塩（りん酸一カリウム、りん酸二カリウム、りん酸三カリウム）の添加効果を検討した。銅イオン添加で影響の見られた赤色102号と黄色4号、5号においては、りん酸二ナトリウム、りん酸二カリウムの添加濃度が高くなるにつれて吸光度残存率は回復した。青色2号においては、りん酸一ナトリウム、りん酸一カリウムで添加効果がみられた。鉄イオン添加系で影響の見られた赤色3号、104号、105号に対してりん酸二ナトリウム、りん酸二カリウムを添加した場合、色調は回復した。また、すずイオン添加で影響の見られた赤色102号、40号、2号、黄色4号、5号においては、りん酸二ナトリウム、りん酸三ナトリウム、りん酸二カリウム、りん酸三カリウム添加で濃度が増すに従い吸光度残存率が上昇することを確認した。アルミニウムイオン添加で影響の見られた赤色3号、105号、青色2号に対してりん酸二ナトリウム、りん酸三ナトリウム、りん酸二カリウムを添加した場合、添加濃度が高くなるほど効果があったが、りん酸三カリウムを添加した場合には濃度に関係なく有効であった。このように、各種金属イオンの添加により生じたタール色素の退色・変色は、今回実験に供した6種のりん酸塩のうち、特にりん酸二ナトリウム、りん酸二カリウムの添加により極めて効果的に防止されており、その効果はすでに報告したEDTACa2Naに代わる色素安定剤となりうることが明かとなった。

キシロースをキシリトールに変換する微生物のスクリーニング

松村　博子

川端　康之

微生物によるキシロースからキシリトールへの変換について検討した。*Candida* 族の酵母12株についてキシリトール生産能を検討したところ、9株についてキシリトール生産を確認した。これらを用いてキシリトールの生産条件を検討したところ、培養液への酸素供給がキシリトール生産に大きく影響を与えることがわかった。キシリトール生産の経時変化を検討したところ、キシロースの資化を終えたところでキシリトールの生産が最大になった。その収率は、最大で25%であった。培養開始時のキシロース濃度について検討したところ、キシロース濃度を上げるとキシリトールの生産量も増加するが、培地中に残存するキシロース量も増加した。

家庭における女子学生と親との交流に関する調査

－本学学生の場合－

一棟　宏子

若井希水子

1. 目的　家族や家庭生活をめぐる問題が多発し、家庭機能の低下が懸念されている半面、家庭には「心の安らぎを得る情緒面」が最も期待されている。「心の安らぎ」は家族のコミュニケーションに大きく関わっている。そこで、本報は次世代の家庭を担う女子大生を対象にアンケート調査を実施し、家族の交流の実態とその評価を求め、どのような家族像を理想としているかその意識について報告する。

2. 方法　2000年7月、本学学生に調査を実施、122件（95.3%）の有効回答を得た。

3. 結果　①調査対象の家族構成は核家族が約6割、3世代家族は全体の1/3、共働き世帯が約半数を占める。②家事を手伝う学生は結構多いが、家事が家族交流を推進するかたちにはなっていない。③家族団らんは「夕食」「テレビ」「雑談」が中心だが、家族そろってくつろぐ時間は「ほとんどない」のが現実で4割弱を占める。④母親には学校の出来事や悩みを打ち明けるが、父親と話をする機会は少ない。しかし家族関係は「うまくいっている」と評価、満足度は高い。⑤理想の母親像として、子どもが小さい頃はしっかり世話をし、成長後は友だちのように話せ、信頼できる母子関係を築くこと、さらに仕事と育児の両立ができ、自己が確立できた母親を描いている。⑥夫に望む父親像はときには厳しく、困ったときに相談できる頼もしい父親。同時に、家事育児を分担してくれる夫を期待している。

コンピュータの援用による色彩調和の研究（Ⅰ）

北尾　和信

機器を使って、色を再現するには、CMYK（青緑＝Cyan、赤紫＝Magenta、黄色＝Yellow、黒＝BlacK）が使用されてきた。コンピュータが普及するとともに、RGB（Red＝赤、Green＝緑、Blue＝青）による表現が重要性をましてきた。

本研究では、モニタ上での色の表現、色料のカラーシステムとモニタ上でのカラー表現、RGBとCMYKの変換、マンセル、オストワルドの各表色系をコンピュータ上で取り扱う際の明度段階、色相環、等色相面について検討を加えた。CMYKとRGBでは、その表現色域の違いから黄色を中心とする色域のみが、ほぼ正確に変換されること、コンピュータ上の明度の段階が対数的に変化することなく、ほぼ割合が等歩度になることなどが明らかになった。これらの予備的な研究の結果を踏まえて、コンピュータを活用し造形作品の色彩の分析とその調和について考えたい。

「似合い」の様相

－被服の色彩に関して－

小林　政司

本稿では、「似合う」ことを「似合い」と呼称することとし、「似合い」、とくに被服の色彩に関する「似合い」を探求する初段階として、「似合う」色の取り扱い方に関する提案を行うとともに、現在知られている「似合う」色の選択、いわゆるファッションカラーコーディネーションについていくつかの手法を概観した。

まず、「似合い」の重要性と「似合い」のとらえ方についての考察を行った。ここでは、視覚対象としての着用者と被服について生態光学的な側面からの考察も試みた。

次に「似合う」色の色彩調和論的取り扱いとして、色彩調和の経験式の応用や調和の様式による分類を、また、視覚心理学的取り扱いとして錯視としてのあるいは対比現象としての解釈や図と地の分化に着目した理解を提案した。

一方、現在、比較的広く知られているファッションカラーコーディネーションの手法をいくつか取り上げ、肌色の分類、判定法などに関する共通点や「似合う」色の決定方法、さらにその提示方法の問題点などを指摘した。

現代の遊びについての一考察

－女子学生の事例から－

北田　明子

遊びは社会の記号の一つであり、現実の何かを反映している。ここでは女子学生の遊びを事例とし、どのような意味が読み取れるのか考察した。

平成11年から13年にかけて、女子短大生、女子大生約250人に日ごろの遊びを調査した結果、150種類以上の遊びがリストアップされたが、多かった遊びはショッピング、カラオケ、映画であった。これらの遊び群の上位30種類を、余暇開発センターによる4つの活動形態、カイヨワの4つの型、チクセントミハイによる6つの楽しさの因子、によって分類を試みた。遊びの傾向は、趣味・娯楽的、“ミミクリ”（模倣）的、休息的であった。さらに、遊びに対する態度として、現実受け入れか脱現実かと、個（孤）志向か仲間志向かの二項の組み合わせで分類を試みた。その結果、個人志向、仲間志向のどちらも脱現実の遊びが多く、最も少ないタイプは、現実の自分を受け入れつつ個で遊ぶという遊びであった。このことは、創作活動、技術の練習を伴う活動があまり好まれていない現実を示している。自分と向き合い、自分と対決する遊びは充実感をもたらすと思われるが、このような実態を学生に示すことも必要ではないかと考える。

「フランス語学習法の再検討」

高瀬　英彦

学習とは「暗記」だと思っている学生が増えた。学習とは「工夫することを学ぶ」と気付いていないし、教員もそのことを指摘することがないようだ。フランス語を学ぶにあたって難しいとなげく前に、ノートの取り方，まとめ方を工夫しろと言いたい。フランス語はその形式　・メカニスムに気付けば日本人には英語よりも学なびやすく、発音しやすい言語といっていい。「暗記」より「単純な基準」の理解とそれの「応用」、つまり「工夫することを学ぶ」ところにフランス語学習の醍醐味があることに焦点をあわせたメモ。

1) 教科書の問題点
2) 英語が唯一の外国語であるとの思い込み
3) 発音が難しいとの思い込み
4) 音節表の大切さ・見直しの提案
5) アクセント
6) 名詞のジェンダー
7) 名詞の先行要素
8) 動詞の法と時制

大学における部局図書室の事例分析

－衣料情報室（1975-2000年度）の総括－

高橋　晴子

1975～2000年度まで、服装の人文社会科学系領域を対象として、学内外の情報サービスを行ってきた、被服学科衣料情報室の活動内容を要約する。さらに、大学における部局図書室の位置づけについて、とくにつぎの観点－教育とのかかわり、学生へのアメニティ・サービス、学内外への情報サービス活動、そして大学図書館との関係－からの分析を試みる。

「暴力的関係性」からの解放を目指す保育実践論構築の試み

－「話し合い」の場のもつ意味に着目して－

福田　敦志

本研究は、「暴力的関係性」のなかを生きざるをえない子どもたちと向かい合う保育実践において、その関係性からの解放を志向する指導論の構築を試みたものである。

その際、「“願いはかなうんだという実感”からのスタート」と「『わたしだってかちたい！』と思えるようになるために」の二つの実践記録について、それぞれで行われている『話し合い』の場に着目しながら考察を進めた。両実践は、いずれも今日の保育指導論の到達点をふまえながらも、保育実践における「話し合い」の位置と意味について新たな可能性を切りひらいていると考えるからである。

上記の目的を達成するために、本稿ではまず、子どもたちの保育園での生活の状況と保育指導論の到達点とを交叉させながら、「暴力的関係性」からの解放の必要性を問題として設定すべきことを論じた。次に、先の二つの実践を「発達要求の組織化」という分析枠組みで照射しながら、「抑圧の構図」克服のための三つの視点を浮かび上がらせた。最後に、フレイザー（Fraser, Nancy）による「公共圏」についての論考を手がかりにしつつ、両実践のもつ可能性を再検討することで、「話し合い」を公共圏としてとらえることで切りひらかれる保育指導の原則と課題を論じた。

以上の考察をとおして、保育実践における①「活動内容の決定過程そのものへの参加」のもつ意味、②「私的な利害関心」を「共通の関心事」へと立ち上げていくことの意味、③リーダーシップへの支持ないし不支持の表明をとおした合意形成の筋道の明確化による「抑圧の構図」克服の可能性を明らかにした。

A Study of Daycare outside hours in kindergarten : Parents' Needs and Childrens' Attitudes

Masuharu Shimizu, Emiko Hirake, Junko Nakamura

98 名の附属幼稚園の保護者が、預かり保育の利用の理由や帰宅後の子どもの様子などを調べる質問紙に答えた。主な結果は次の通りであった。(1) 預かり保育は様々なニーズを持つ保護者にとって役に立つ、(2) いくつかの利用理由は、利用回数と関係がある、(3) 年長の子どもは預かり保育中の遊びを家でもしたがる、(4)年少の子どもは預かり保育から帰宅後、母親に甘えたがる。この種の研究の将来の幼児教育に関する意義が議論された。

比較論的英米文学随想（承前）

－『風と共に去りぬ』－

林　彦一

佐伯彰一氏は、『緋文字』を以ってアメリカ文学の特徴を説いた。しかし、そのことでなら、大衆文学としての地位しか与えられていない『風と共に去りぬ』の方が、はるかに効果的である、というのが本稿のアルファでありオメガである。そしてそのコアには「戦争」というものがあり、日本人は平和ボケというか恵まれすぎた（過ぎている）せいか、戦争はおろか闘争とか競争までも排斥しようとし、偉大なる矛盾とも言うべき「戦争」の効用（？）に昏くなっている。本稿はある意味でその警告文であるが、これを書き始めたのと機を一にして、アメリカのテロ事件があったことに、何か不気味なものを感じている。(280)

山路の露注釈（十）

西木忠一　池田良子

平安末期または鎌倉初期に、『源氏物語』愛読者により、「夢の浮橋」の巻後日譚として創作されたのが、「山路の露」である。

文章は至って流麗。『源氏物語』に精通した読者の筆になる作品であって、近時「世尊寺伊行」の女「建礼門院右京大夫」を、その作者とする説が提出されている。

本注釈は流布本（『続群書類従』物語部所収）を底本にし、「補記」の項にいささか重みを置いた。

本稿に収めた各段の梗概は次のごとくである。

髪をおろした浮舟を前に、乳母子の右近は胸のうちを涙ながらに語り、いかなる折にも、決して姫君に遅れまいと心にきめていたものをと、尽きることのない深い悲しみに泣きくずれるのであった（二十八　五重）。

右近から薫の愛情の深さを聞くにつけ、浮舟は薫・匂宮という二人の男性の間をゆれ動いたわが心のうちを思い見、これも前世からの報いであったのだと、しみじみ悟るのである（二十九　人目）。

いよいよ下山するに至って、浮舟の母は娘を都に連れて帰ろうと言う。だが、浮舟は今更の思いがして帰京の話にのって来ない（三十　客人）。

漢代の古官箴　訳注篇（上）

佐藤達郎

中国の官箴とは、元来は各官司が帝王に献ずる戒めの言葉であったが、宋代以後、特に地方官吏のための行政指針書が編まれるようになると、それらが新たに官箴の名で呼ばれるようになる。これら宋代以後の官箴は、近世中国の地方政治の実情をリアルに反映しているため、従来よく知られ、かつ歴史研究の素材にもしばしばなってきた。一方、前者、古来の官箴はその文学作品的な性格ゆえ、歴史研究の分野では注目されることが少なかった。しかし、前者の官箴（「古官箴」）のスタイルを事実上確立した前漢末の揚雄、それを継承した後漢の胡広らの著作の背景には、一定の歴史的背景があったと予想される。それらの著作が、あたかも官僚制の再編期に行われていることも、現実と著作との関連を示唆するものである。筆者はこれらの作品を通じて、当時の官僚制に対する意識・理念とその変遷を窺おうとする。本稿で行う訳注は、そのための基礎準備作業である。紙幅の制限上、本稿では揚雄の官箴のうち半分までを取り上げる。